

アイチ(愛知)の地名の由来が、ヤマトタケさん由来にあったとは！

年魚市湊、氷上姉子神社、(名古屋市緑区大高町)のことが解ったのは、『ホツマで

読むヤマトタケ物語』を書き終わってからの事でした。

ページの勘定を何時も間違っていました。『ホツマで読むヤマトタケ物語』の時こそ、今度こそは間違わない！と、原稿用紙から一歩進めてワードで原稿を書いていました。が、結局大間違いでした。もう、紙数は尽きたと勘違いして、まとめを急いでいました。とにかくにも、「ル」を取りたいの一心でした。

「イン・デザイン」にしてからは、もうページ数の間違いになりません。

アユチダは年魚市湊ですね。そこから、アイチ(愛知)になるのです。

その当時、ヤマトタケさんの時代はアユがずっと多かったことでしょう。景勝の地だったアユチダ。今でも、上流の本曾三川には、そのうちでも特に長良川は観光の鵜飼も現存していてアユの川と言えましょうか。

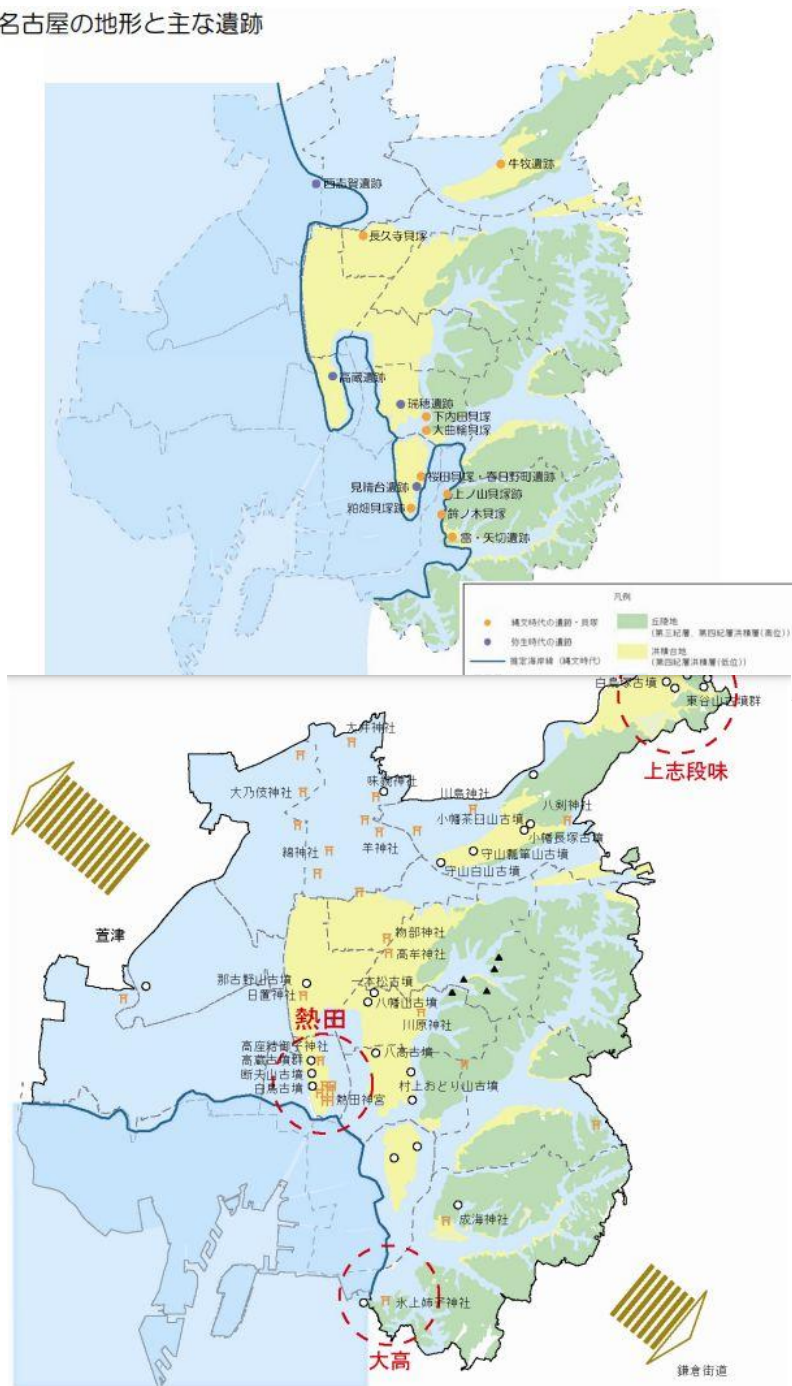
それにしても、ヤマトタケさまのことを「ヤマトタケル」と言うようにしてしまったのは、罪が大きいと思います。伴信友の談と、飯田武郷『日本書紀通釈』からです。

「タケル」の言葉の用例は、ヒトノヨから始まります。タケルのヤカラ、朝敵のことです。シギタケル(エシギ、29・36・29・51)、イツモタケル(フリネ、34・56)、クマソタケル(アツカヤ、38・45)、クマソタケル(オチの子、トリシカヤ、38・91・93・93・94、40・31・32)

ヤマトタケさまを、その同じ類として良いのでしょうか？

伴信友は、クマソタケルが同じタケルと付けたと断じたのでした。大間違いでした。

名古屋の地形と主な遺跡



40、アツタカミ ヨをいなむ アヤ 前半

十二代 景行天皇 38・39・40アヤ、三分割の下の前半

40・01 ラシロワケ（景行天皇）さんのマキムキ（桜井市巻向）のヒシロのミヤ」の43年（アスス820年）の事でした。

ハル（春）にヤマトタケさんは、キシチ（木曾の山道）からオハリ（尾張・名古屋）にやつのことで至ります。

40・02 オハリのムラシ（後の連）は、タケトメ（ニキネさんのお子さんのホノアカリ・ムメヒトさんの後裔）を祖先としています。オハリのムラシの家（後の熱田神宮）に入られました。ヤマトタケさんのたった一人残ったツマ（妻）のミヤスヒメは、東征への見送りに同行して、途中にチチ（父）のオハリのムラシの家にて待っておられました。ヤマトタケさんはミノ（美濃）の山中の迷いの路から出て、ようやく、ミヤスヒメと会うことが出来ました。

ミッルナデ

③ 時系列ではこの時の出来事が、40・37に記されます。寝巻で迎えた話です。

40・03 そして、月を越してオハリに留まりなさいますヤマトタケさんでした。そのうちに、ヤマトタケさんはおっしゃいますのでした。

「サカオリのミヤは、昔のハラのミヤです。なお、今に長らえて趣も残っています。我が願いは、うつして（絵に写して）ヒメと楽しみたいものだ」

オハリのムラシは応えて答えます。

「トミ（私）が行きまして描き写さん（私が行って絵に写して来ましよう）」「キミ（ヤマトタケ）はアスス（喜んで納得する）のでした。」

40・04 オハリのムラシが東に下ってサカオリのミヤを詳しく絵に写します。オハリに戻っ

てヤマトタケさんにサカオリの絵を差し上げますのでした。

40・05 さて、アラフルカミ【詳細は未詳】のある事をお聞きになられたヤマトタケさんは、これを静めるために向かわれました。イフキの山にそれが出るということです。しかし、何故かツルギを解(と)いてオハリに置いて行かれました。軽んじられたのでしょうか？ カミチ(イフキの山)に入る際にもニギテ(供え物、幣)も用意なさいませんで直ぐに行かれます。そのミチには、イフキカミがヲオロチ(大きなオロチ、大蛇か?)の形になして横たわります。ヤマトタケさんは、まだも軽んじられました。カミとは知らず。つまり、イフキのカミ(イフキヌシ)の心に思いが至らなかつたのでした。イフキヌシは甥であっても、かつてソサノヲが流浪の時代に助け起こしてくれた大恩のある人でした。ソサノヲを、生まれ変わりの前世だと思ふなら、ヤマトタケさんはイフキヌシに感謝の念を持たなくてはいいけません。

40・06 しかし、ヤマトタケさんは、オロチに言います。

「これナンチ(汝)、アレカタカミ(荒れて偏ったカミ)の使いなり。アに(打消し、否定)求めるに足らんや」

と、オロチを踏み越えて行かれるのでした。イフキカミはツラヲを降らしてカ(光)を奪います。強(し)いて凌ぎ行かれるヤマトタケさんでした。イフキの山からワツカ(僅か、か?)出で行く事が出来ましたが、「コロロは酔ったような感じでした。

40・08 身体も燃えるように熱くて、泉に冷まされるのでした。サメガサ(醒ヶ井の湧水、米原市醒井)の名称になりました。ミアシ(御足?)の痛みをやや(ようよう)覚られるのでした。

40・09 オハリに戻られましたが、ミヤスヒメの待つ新築の景勝地のアノチタの家(氷上姉子神社、名古屋市緑区大高町)には行かれませんでした、ミヤコにミチをお取りになりました。イセのミチ(伊勢路、ヤマトヒメに報告か?)にと。(これこそがイモヲセのミチだとも。病氣をうつすのを避けるためか?)

オハリからミヤコへと進まれてオツ(尾津神社、三重県桑名郡多度町、論社多し)の一つ松に着きましたら、松の根本にツルギがありました。3年前の忘れ物です。良く残っていたものです。そこで、ヤマトタケさんは一つ松をウタで褒めるのでした。

回△△夷中 ヲ々中今○又△ おわすれと たたにむかへる

取中卒中卒 ◎○夷中中中卒 ひとつまつ あはれひとつ

中中中今 中中中今中中 ひとにせは きぬきせましお(を)

中中○中中中 たちはけましお(を)

(置いて忘れてしまったツルギを守って、今まで待っていてくれて有り難う。あっぱれな事です。人であつたら、キヌ(上等の衣服)を着せたやりたいものです、タチ(ツルギ)も佩かせてやりたいものです)

40・12 いささかになくちみて(慰め)、行かれるのですが、病はひとくて足は痛み、歩みは

ミエ(三重)に曲がるのでした。ミエムラと命名されました。(三重県の名称の元です。三重県三重郡、四日市市の中央部) ツエツキサカ(杖突坂、四日市市、追分から約2km)に、ようやく越えられましてノホノ(能褒野御陵、亀山市か? 鈴鹿市加佐登町、加佐登神社か?)に至りますと痛みが重篤になってこられました。

そこで、ヒタカミから、「アメのミチ」を学びたいと言って付いてきていたトリコ(熱心にミチを求める人)の5人は、ウチ(イセの宇治、伊勢市)で勉強を続けるように手配させます。オオカシマさん(『ミカサフミ』の最終編集者。234歳)のソエヒトとします。

40・13 キビ(吉備)のタケヒコはミヤコに向かわせます。ヤマトタケさんのフミ(手紙・文書)をラシロフケさん(景行天皇)に届けるためです。キビ・タケヒコは、コシチを巡ってきて、ミノにてタマトタケさまと合流したのでした。

さて、ヤマトタケさまのそのフミには次のように記されています。

40・14 「ハナヒコ(ヤマトタケ)モフス(申し上げます)。

トミ(わたくし)は昔、ミコト(スハラギのご意思)を受けましてホツマ(関東地方、カミヨの光輝に)ウチ(討ち、まつろわせてゆく、政治参加させる)をおこないました。

アメ(天然自然)のメクミ(へるへる回ってもたらされる恩恵)のおかげでした。また、イツ(「ト」のラシテ)の建国の当初からの威徳の集まり(に因)よ(って成し遂げることが出来ました。アラフルカミ(朝廷に反抗する、ヒタカミのミチノクや、カク・モトヒコを支える反朝廷の人たち)も、まつろわせる(朝廷の政治に参加させる)ことが出来ました。フツク(悉く)ヲサメ(教え治めて)得ました。

40・15 ですが、今(ここまで戻り帰って来ましたら、もうイノチ(生命)は日が落ちようとしている方方になってしまいました。

乞い願わくは、何時の日か、ミコト(みこころの御意)に感謝してご報告を申し上げます、と強くお願いいたします。

残念ながら、ノ(原野、成り固まった)に臥してタレ(誰か)と語ることも出来ない状況に立ち至りました。ただただ、惜しむらくは、会い見(まみ)えることが出来ない事で御座います。これが、「アメのノリ(天地自然の法則)」なのでしょう、かー!

フミ(手紙)の筆記をここで止めさせました。

さらに、ヤマトタケさんはおっしゃいました。キビ(吉備)タケヒコはヤマトタケさんのその最後の言葉を、伝えます。

40・17 「キツ(東西)をムケ(平定する)て、コト(任務)の成就が出来ましたが、ミ(身体)を滅ぼす事になりました。またさらに、イクサ(従軍に携わった人々)の彼らを少しの日も休ませる事を為し得ませんでした」

それで、ナツカハキ(後の大善職、高橋家の先祖)におっしゃいますのです。ハナフリ(金銀)をすべて分け与えるようにと。それは、イクサ(従軍に携わった人々)の彼らのすべてに別けさせるのでした。

そして、ヤマトタケさまは辞世のウタをお詠みになられます。と、もう、世を去られましてアツタノカミとなってしまうたのでした。 ヲアミ(身体をぬぐって)して差し上げ、ハ(衣服)を改めましたのでした。

キビ(吉備)のタケヒコは、座を改めてサ(南)に向かいます。そして、ヤマトタケさんの辞世のみウタを申し上げるのでした。

○卒𠩺田𠩺

あつたのり

𠩺⊕𠩺𠩺𠩺 𠩺卒田𠩺𠩺𠩺

いなむとき きつのしかちと

𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 卒𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺

たらちねに つかえみてねと

𠩺田𠩺𠩺𠩺 𠩺田𠩺𠩺𠩺𠩺

サコクシロ カミのやてより

𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 𠩺𠩺𠩺𠩺田𠩺𠩺

ミチうけて うまれたのしむ

𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 𠩺𠩺⊕𠩺𠩺𠩺𠩺

かえさにも いさなひちとる

𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺 田𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺

かけはしお(を) のほりかすみの

𠩺田𠩺𠩺𠩺 𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺

たのしみお(を) くもぬにまつと

𠩺𠩺𠩺田𠩺𠩺𠩺

ひとにこたえん

(アの宇宙の中心からの繋がり集まってるの楽しみのノリ

(この、いなむとき(この世を辞す時)に思います。キツ(東西)へのシカチ(使いの道々)にと、タラチネ(両親)にお仕えしてきて未だ十分に為し得ていません事が残念です。

サコクシロ(天地の生死往還の定め)をお教え広められましたアマテルカミのヤテ(広い方式)から、ミチを受けましてよく解るので御座います。

生まれ来て、樂しみて、また、カエサ(元に帰る)に至ったわけです。イサナヒ・チトル(おいでおいで、と、チトリ(千鳥)の飛び方)の架け橋(雲の階段)を、今登って行こうとしています。そこにはカスミ(霞)のクモ(雲)の棚引いて、樂しみが待っているようです。アモトに戻る樂しみを、すぐ目の前の先のクモ𠩺(雲の棚引きの高み)に待っていますと、ヒトに答えたい気持ちです)

40・21

モモ(何回も)

歌いになれつつ、長く永久(とわ)に目を閉じられてカミ(亡き人)になられました。私たちには他に為し行くこともできません、お弔いのお見送りを致しましたので御座いました。アツタノリのご辞世のウタから、ヤマトタケさんのことを、アツタカミと皆が惜しんで讃えました。

ミツルナビ

㊦ アツタカミのカミを神と直訳したらおかしくなりますね。「直訳偽書の秀真伝(しゅうしんでん)」は、こうして作られます。現代語の「神」はゴロ的な意味が強いからです。アツタノリのノリも、どの漢字に当てても違和感があります。

ご辞世のみウタは、オハリへも届けまして。また、フミはミヤコへと、私、キヒ(吉備)タケヒコが持ち上った次第で御座います。

40・22

スハラギ(景行天皇)は、強いショックを覚えられました。居ても立っても居られないのです。食べ物もアチ(味)あらずにして、お食事も喉を通らない状態でした。日夜嘆き悲しまれるのでした。

ヲシロワケ（景行天皇）さんはおっしゃいます。

40・22 「昔（アスス814年）にクマソ（トリイシカヤ）がまた叛いたのを、ヤマトタケはまだ若くアケマキ（髪型、若い時代の髪型、26歳）にして、ムケ（平定）得たのです。その後は、マツリコトを輔弼する立場で、次代の世を託すべきヒトとして過ごしていました。

ミツルナヒ

③ 26歳の事、『日本書紀』は16歳としています。アゲマキからの類推でしょうね。『日本書紀』の間違いです。

ホツマ（東国地方）の反抗の事態に遭遇して、討たすべき人がなかったのです。やむなく、ヤマトタケに討たしめることになってしまいました。

明け暮れ、ヤマトタケの帰る日を待ちつつ居ましたのですが、こんな事になってしまったのです。

これは、何かの災いか、何かよからぬ原因があったのか？

ユクリ（少しの猶予）も無くて、ア（アモト）から召す事など、と。

これから先、ヤマトタケ無くしてタシ（誰）とミツサ（鴻業、まつりごと）を教え治めてゆくべきか？ と、思います」

40・25 ヲシロワケ（景行天皇）さんは、ヤマトタケさんのカミ送り（全国民をあけての葬送、いわば国葬）をすべしと、人々にミコトノリをなさいました。

40・25 さて、オモムロ（遺体）がイトリ（大きな鳥）になってお墓から飛び去ったと、言う報告が来ました。そこで、お墓のみヒツ（櫃）を開けてみしたら、ご遺体は無く、カナムリ（冠り）と、サク（杓）と、ミハ（お着物）があるのみでした。カラ（ご遺体）は無く、シラ・イトリ（白い大きな鳥）が飛び立って行ったのであるようでした。

ミツルナヒ

③ シラ・イトリは、どんなトリだったのでしょうか？ 現代語に言う「白鳥」はシベリアからの渡り鳥です。冬

季に新潟あたりまで飛来します。こうして考えると、渡り鳥の「白鳥」ではないようですね。コウノトリかシラサギが候補に挙がるかと思っています。シラサギは、4種類あるそうです。ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギです。

40・26 そこで、シラ・イトリの飛び行く先を訪ねてみしたら、ヤマトクニ（奈良盆地）のコトヒキハラ（御所市、こせし）にオハ（尾っぽの羽根）がヨエタ（4枝）落ちていました。（近くに、掖上のホホマの丘。クモクシのフミを授かったオクラヒメの大倉姫神社あり）また、カワチ（河内、大阪府）のフルイチ（羽曳野市古市、近くに応神天皇陵、仲哀天皇陵あり）にもヨハ（4羽）の羽根が落ちていました。そこやここなどに、ミササキ（御陵）が作られました。

あちらこちらにシラ・イトリのミササキが作られました。いよいよ、クモヅ（雲居）に飛び上がり飛翔して行き、残すオハ（尾っぽの羽根）は、カミのヨのヨハキシ（カミヨからのお掃除、再び生じて来る）のようです。キツ（東西）もすべて平定し終えればイノチ（生命）が尽きるヤマトタケさん。

40・28 ．．．これが、タケさまのおっしゃるアメノリと言うものでしょうか？

40・28 ．．．このキミ（ヤマトタケ）は、ヒシロ（景行天皇）のスハラギのフ（2番目）のミコ（皇子）でした。ハハ（母）はイナヒヒメ（キヒ（吉備）のヲ・イラツメ）さんでした。シハス（12月）のモチ（満月）にモチハナ（お餅の花飾り）を作っているうちに産気づいて双子が生まれました。兄はヲウスさんで、モチヒトと呼ばれます。弟がコウスさんで、後のヤマトタケさんです。イミナ（実名）はハナヒコと付けられました。アメの名（自然の成り

行きからのお名前でした)ですね。

40・30 双子が成長しての後の頃に、クマソ(トリイシカヤ)がまた叛(そむ)いたのでした。

クマソ(トリイシカヤ)を平定するために、コウス(ヤマトタケ)を使わしたのでした。そうしたらコウス(ヤマトタケ)は、ただ一人敵陣に決死の潜入をしたのです。いわばカミカゼ攻撃の初です。頂上打破の、オトメ(少女)姿に変身しての決死の攻略を為し行きました。敵陣奥深くに女装して潜入しハタ【詳細は未詳】のツルギで反乱の首領のトリイシカヤのムネ(胸)を刺しましたのです。

40・31 その、勇気に感嘆したのがトリイシカヤ(クマソタケル)でした。トリイシカヤはここに言います。

「しはし(暫し、待たれよ)」と。

トリイシカヤ(クマソタケル)は続けていいいます。

「ナンチ(あなた)はタ(誰?)そ(そ)」

コウス(ヤマトタケ)は、答えて言います。

「われは、これ、今スヘラギ(天皇)の子の「コウスです」

タケル(トリイシカヤ)は言います。

「ヤマト(日本)には、ワレよりもタケ(極めての勇氣のある)たる者は、あなた、コウスのミコ(皇子)だけです。感服しました。ミナ(御名)を奉りたいです。お聞き届け下さいますか?」

許せば、クマソタケル(トリイシカヤ)は、ミナ(御名)を「ヤマトタケ」(ルは、無し)と捧げました。(尊敬の念が充滿なので、ルは無し)

コウスミコは、ヤマトタケと名乗りの名を変えてクマソの反乱を討ち治め得たのでした。まさに、アメのホマレ(天下に名だたる榮譽)です。

40・33 ヤマトタケさんのお子さんの事を説明しましょう。

ヒコイマス(9代フトヒビ、開化天皇のミコ)のマコ(子孫)のタンヤの娘さんのフタチイリヒメとの間に儲けたのが、イナヨリワケ(タケヒコ)と、タリナカヒコ(カシキネ、後の14代仲哀天皇)と、ヌノオシヒメと、ワカタケさんでした。

40・34 キヒ(吉備)タケヒコの娘さんのアナトヒメをウチツマ【未詳の位】との間には、タケミコと、トキワケとが生まれます。

40・35 タシマモリの妻となったハナタチハナは、のちに再婚します。夫のオシヤマの義理の娘となったオ(ヲ)トタチハナヒメをスケツマ【未詳の位】として、ワカタケヒコと、イナリワケと、アシカミカミミと、タケコガヒと、イキナガタワケと、ヱソメヒコと、イガヒコを儲けます。ワカタケヒコは、13代の皇位をお継ぎになられます。(成務天皇)

40・36 オハリのムラシ(連)の娘さんのミヤスヒメは、ヤマトタケ壮年に至ってからのツマでして、タケタと、サエキの二人が生まれました。

14ヲ(14人の男の子)と、ひとりのヒメがありました。

40・37 早くからのツマは既に、亡くなってしまっていて、一人、ミヤスヒメだけが残っていました。

40・38 ホツマ・ウチを終えたヤマトタケさんは、ハラミヤマからシナノチ(信濃路)を経て、オハリに辿り着きました。シナノのミチは険しく架け橋を伝うように行かねばなりま

せん。

苦勞の末に美濃に出ることが出来ました。そして、待つ身のミヤスヒメさんは、ずっと首を長くしてお待ちしていました。何時に帰着かもわからないのでした。

突然に到着したヤマトタケさんでした。ミヤスヒメは寝間着のままに出で迎えました。ヒメの裳裾にツキヲケ（月経）の染みたところを見て、ヤマトタケさんはミシカウタ（短歌）を詠まれました。

40・39

𐤀𐤁𐤏𐤏𐤔𐤕 𐤓𐤔𐤕𐤏𐤕𐤁𐤏𐤕

ひさかたの アマのカクヤマ

𐤏𐤏𐤕𐤏𐤕𐤕 𐤔𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

とかもより さわたりくるひ

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤏𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

ほそたはや かひなお（を）まかん

𐤏𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

とはすれと さねんとあれば

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

おもえとも ながきけるその

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

つきだちにけり

（光輝ある大昔からの伝統の教え収めてゆく治世は、アマの（天下に名高い）カクヤマ（富士山の古名）に際立って言い継がれてきました。「トのヲシテ」の事が古い事でありました。「カモ」はニキネさんの尊き事績の代名詞にもなっています。来る日も来る日も、どれ程にも多い月日・歳月だったことでしょうか、と思います。それに、比べましたら、私のホツマウチの日々など、ほんのちょっとだけの日数でしかありません。

と、思って来て見はしましても、私にとりましても、あなたにとりましても、実に長い日々であったことが、と思います。

長い不憫な日々 of 慰めにと、せめて、カイナ（腕）に抱いてと思いますと。さあ、一緒にゆつくり休みましようと思ってみましても、ソ（揃って素晴らしくも完全な）の、あなたの着ているソ（着物）のスソ（裾）にも、ツキ（長い年月、尽きての極めての至りの意味）の経（た）っていたことが慄（し）の（ばれて見えてきて、愛（いと）おしくて仕方がありません。と共に、如何にも尊ぶべきことだと思ひます）

ミヤスヒメは、カエシウタを詠みます。

40・41

𐤔𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤓𐤔𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

たかひかる アマのヒのミコ

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

やすみせし わがオホキミの

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

あらたまの トシがきふれば

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

うへなうへなきみまちがたに

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

わがきける オスヒのスソに

𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕

つきだたなんよ

（沢山の人たちの思いのこと、協力を得て、タカミムスビのヒタカミの人々にまでも、「トのヲシテ」を現在に通し直した光輝を、わが君（ヤマトタケ）は打ち立てられました。この功績はアマのヒのミコ（アマテルカミ）の尊さにも及ぶものなのでしょうか？ ヤスミ（建国当初の八方にミチを及ぼされた）の功績にも等しいのかも知れません。尊いわがオホキミのアラタマ（新たな養い治め）のトシ（年）が来てもらいたいものですな、と、願っていました。うへなうへな（良い事でしょうね）と、キミをお待ち申ししていましたら、私の着ているオスヒ【寝間着？】の裾にもツキがたってきていました）

木のミネ（霧島山）にお登りになりました。ヒノヤマ（富士山）の朝日に向かつて、おキサキさんのコノハナサクヤヒメのご墓所に向き合う形です。カミ・シモ（カモ）を恵むカミ（先祖）と成られましたのでした。クニの名も此れに因んで、「カモ」と呼ばれました。「カ」と言いますのはカミ（祖先）の遍く照らすです。「モ」はシモのアオヒトクサ（国民）を恵まんとなさいますことです。ナルカミ（雷雨）の雨の程の良いようにと、火と水とを別けて祭ってコントロールすれば、ミソコの池などもあって、穀物の収穫は豊かになります。タミ（国民）を賑わせるイサオシ（功績）こそは、カモ・ワケツチ（ニニキネ）のカンココロなのです」

このように、思し召されましてカミマツリ（ニニキネさんをお祭り）をなさいますのでした。そして、ミヤコの空をナカム（詠む）みウタをお詠みになりました。

かたゆ くもいたちくも

「はしきよし」を「はしきやし」として、ナカツホ（中心の10音目）の「か」から6音

戻ると「や」にあたります。また、「か」からの音進むと「た」に当たります。これを連ねると「や」「か」「た」でして、旅屋の「やかた」にたまたま会って、そこから出で立つマロヒト（珍しき旅人）だから）

ミコやウカラ（親戚の人達）が、悲しむことを少なくしてあげようと、ヤマトタケさんは思われたのでした。「や・か・た」を詠み込んだツスウタは、人々に迷いを残させなくするためのサトシウタです。ヤマトタケさんの深き思いの導きのおウタです。

そして、ノホノ（能褒野御陵、亀山市か？ 鈴鹿市加佐登町、加佐登神社か？）にて、カミアカリ（お亡くなり）の際にノコシウタをお詠みになりました。

40・46

○ハホウ田 田中丞田中田

あいちたの おとめがここに

◇田中田 田中田中田

わがおきし いせのツルギの

◇田中田 田中田

たちわかるやわ

（アイチタ（年魚市湯、氷上姉子神社、名古屋市緑区大高町）に待つと言っていたオトメ（ミヤスヒメ）の床に私が置いてきたイセのツルギがあるから、夕ちに拠ってヒメと夕チ別れる事は決してありません）

40・47

イモ・セ（妻と夫）のミチは連なっていました、身体や物は例え別れても、ツリノヲ（繋がり）の緒は切れる事などありはしない、と。ミヤスヒメへの導きのアメノリ（天然自然の法則）を説いたウタでした。

40・48

このウタを受け取って、ヤマトタケさんのお亡くなりを知ったミヤスヒメは、ショックで悶えて絶え入りまして、ほとんど生きていくかどうかになってしまいました。

ミヤスヒメの父のオハリのムラシ（連）は、見ていられなくて、ミヤコに登りました。

「ハラミ（富士山）の絵でヒメと楽しみたい」と言っていたヤマトタケさんの願いを、ラシロワケさん（景行天皇）に伝えるためです。オハリのムラシ（連）は、ハラミ（富士山）の絵も持ってミヤコに登ります。干潟を展望できる景勝の地のアイチタ（年魚市湯）のミヤ

ひかみ あねこ

（氷上姉子神社、名古屋市緑区大高町字火上山）も完成しました。ここに待っている、ミヤスヒメとも共に、ヤマトタケさんのミタマをハラミ（富士山）へ赴かせたい、と、オハリのムラシ（連）は願うのです。

ラシロワケさんも、思いは同じでして、早速タタネコ（オオタタネコ222歳）にイハフ（祭主）サラシカ（勅使）としてハラミ（富士山）へのワタマシ（渡御）の司を命じました。オハリのムラシはカフト【主催者、か？】です。また、ヤマトタケさんのミコ達をミユキのソナエ（副主催者）と為しました。厳かな、葬送の列になります。いわば国葬です。

40・50

み墓から飛び至ったシライトリが、羽根を落としたと伝えられました。

コトヒキハラ（奈良県御所市富田）に落ちた4枚の尾の羽根と、フルイチ（大阪府羽曳野市軽里）に落ちた4枚の尾の羽根をミヤコに持ち登ります。ノホノ（能褒野御陵、亀山市か？ 鈴鹿市加佐登町、加佐登神社か？）に残されていたカフリ（冠）とサク（笏）とミハ（二）衣裳も、共にそれらをミタマケ（お祭りの依り代）に入れて、シラミコシ（白神輿）に乗せて担ぎます。

40・51

ヒシロ（景行天皇）44年（アスス831年）のヤヨヒ（3月）11日のタソカシ（薄暗くなったころ、月も沈みかけます）にすべてが整って出発です。ノホノからヒカシ

(東)にと指して行きます。現代の「ヨシ」では、4月のおわりのあたりです。

丸くなり始めたツキ(月)の明かりの元に、ミコシ(神輿)は進み行きます。モロ・ツカサ(諸臣)は一行を囲んで、タヒマツ(松明)を持ちかざします。

ハラミ(富士山)への行列のサキカリ(先がり、露払い)はサカキ(榊)を持つ20人です。ソエ・カフト(副の主催者)はサルタヒ「カミ」のミカホ(顔)当て(お面)を付けます。カフトの8人はヤトヨ・ハタを掲げます。オオカフトノ(オハリのムラシ)はカフリ(冠)とミハ(正装)です。ミハシラ(ヤマトタケさんの依り代)を持ちますトミ(臣)の8人が続きます。オシヤマ・スクネ(ヲトタチハナヒメの養父)は、カフリ(冠)とミハ(正装)です。ヨハキシ(箒状のモノか?)を持つトミの2人は先導です。キヒ(吉備)タケヒコも同じく前に添います。オオタンヤワケ(フタチイリヒメの父)もカフリ(冠)とミハ(正装)で、ツルギを捧げて行きます。そのトミ達は10人です。

この後に、本体のヤマトタケさんの遺品を入れたミコシ(お神輿)が続きます。アオホビ(日覆い)を差し掛けます。ヲサのトミ(所縁の深いトミ)や、イエハト(郎党の人々)など30人が続いて行きます。この後にキヌ(絹布)をヨタケ・ヤタ(4丈・8尺)にと二流れが続きます。キヌには、ミコ達が縋(すが)りゆきます。

アマテルカミの遺るノリに拠ってです。イワイ・サラシカ(オオタタネ「222歳」)が続きます、トミ達は12人です。このあと、ミユキ・モリ(一般世話役)や、モロ・ツカイ(奉仕人たち)が続きます。皆々、ヤマトタケさんをハラミ(富士山)に送り行くのでした。

夜中までの巡行を、6夜まで至りますと、ハラミヤのオホマのトノに到着しました。オホマは、富士山南麓のミヤで、かつて幾つもの名前で呼ばれていました。古くは、トシタミヤでして、ハラミのミヤとも、ハラミヤとも、サカオリミヤとも呼ばれていました。現在の浅間大社(静岡県富士宮市宮町)に所縁を見出すことが出来ます。地震や災害などで、遷座が為されています。

ミコシは、オホマのトノに着きまして、ヤマトタケさんがヨ(世)に居られますが如くに、ミアエ(お食事)の用意をしました。ミヤスヒメは一足先に着いていて、自らのキリヒ(切り火)でカヅ(お粥)を炊(かし)がれていまして、ヒラハ(平皿)に盛りました。ミヤスヒメさんが、カヅ(お粥)を差し頂いて、オホマのトノに先に入りまし待っておられました。そして、ミコシの到着です。ヤマトタケさんのみ前に、カヅをお供えてミヤスヒメはおっしゃいますのでした。

「このミケ(お食事)は、昔、イフキヤマからのお戻りの際にも捧げたものでした。病にお苦しみだと聞きましたので、お日様の力を召されて欲しいと、わたくし自ら炊きましてお待ち申しておりました。

ところが、お寄りになりませずして、ついに、逝かれになられてしまいました。

チチ(千々に、縮み縮み)に悔やんでおりましたが、今ここに、またキミのカミ(ミタマ)はおいでになられました。どうぞ、ミケをお召し上がりになってくださいませ。ウタもお受けになってください」

と、ミヤスヒメはツツウタを差し上げました。

○内卒由田 ○ハナヲ由由 ありつよの あいちだにまつ

水戸の同火主丹 きみがひるめし

(ありつよ)(有りつせ、生きておいでの頃)の事で御座いました、アイチタ(年魚市湯)にて、キミのガ(良くない事、病)を日の力で直して差し上げたいと、炊いでお待ちしていたメシ(お粥)で御座います)

40・60 二度、朗讀しましたら、イサヨフ・ツキ(モチ(満月)の翌日の月、旧4月16日)の光もホカラカ(形を形成してゆく力の強くなる)に照らします。シラ・イトリが何処からともなく飛び来りまして、カヅ(お粥)を食べました。

そして、白雲にと姿を変えてゆくのでした。そこに、ヤマトタケさんのみたまの声が届いてきました。ミヤスヒメのツツウタに應えるツツウタです。

◎内卒由田 ①ぬ内卒四丹ホ ありつよの はらみつほしき

糸内口川少君丹

ちりお(を)ひるめし

(有りつせの事に、思い残りだったのは他でもありません。あなたが心を込めて親(みず)から炊いしてくれた、チリ(ガ、良くない事々)をヒル(払い除く)メシ(お粥)です。これを、お腹に満たすほどに食べたかったものでした)

クシヒル(奇跡)の出来事でした。人々は、マコトにおそれて拝みて去るのです。

40・62 また、オホマのトノからヤマトタケさんのミヤ遷しをニイハラ【詳細は未詳】へと移祭します。この時にも、オオタタネコがラシロワケさんからサラシカ(勅使)のニギテ(幣)を賜りまして、勅命を拝して事に当たりました。オハリのムラシ(連)とも同任です。ヤマトタケさんのミタマを、ニイハラのオホマのカミと名付けてお祭りするのでした。

40・63 カミオクリ(見送りのお祭り)をします時にお粥をお供えするのが、「ヨ(世)をイナム(辞世する)」「の」「チリ・ヒル・メシ(良くない事を・払い除く・お粥)をお供えするノコルノリ(遺る方法、前例)となりました。

・ 後半に続く ・